

第30回特別展 移管資料展 (5) 「きもの、乙女たちのハレ姿」

川 本 利 恵*

はじめに

平成30年度は、移管資料展の第5弾として、第30回特別展「きもの、乙女たちのハレ姿」を、平成30(2018)年10月10日(水)～11月1日(木)の期間、千代田三番町キャンパス(以下、「三番町」という。)1号館ロビーにおいてプレ展示として、前期:11月12日(月)～12月21日(金)、後期:平成31年1月7日(月)～2月8日(金)の期間、本展示として町田キャンパス(以下、「町田」という。)生活文化博物館にて開催した。

この企画は昨年に引き続き、旧東京家政学院短期大学(以下、「短大」という。)の研究室所蔵資料による移管資料展の第5弾である。昨年、和裁研究室の資料の中から伝統的な工芸品の着尺地や帯などを中心とした特別展を開催したが、今回は和裁研究室資料公開の第2弾として教員や卒業生などから寄贈された資料で構成することにし、引き続き短大当時和裁研究室に所属していた正地里江助手(以下、「正地先生」という。)に協力を仰ぐことになった。

1. 資料の整理

正地先生には、一昨年の時点で昨年度と今年度の特別展の内容を検討していただき、昨年は重要無形文化財保持者の作品や伝統染織品、糸の工程標本や道具類を中心として構成し、今年度は寄贈資料を中心に構成することが決まっていた。

和裁研究室の資料は、町田の大江記念ホール棟4階の教員研究室の空き部屋に平成22(2010)年度から保管していたので、展示する際には燻蒸をしてからと考えていた。今年度の特別展で使用する資料は、昨年の8月に学院史関係の資料を保管するための旧書道教室を使用して燻蒸を行い、燻蒸後は旧書道教室内に設置した箆笥に収納した。

2. テーマの決定

寄贈していただいた資料のうち婚礼衣装や礼装を中心とすることが決まっていたため、昨年の12月の運営委員会には4部構成で資料点数は一式となっている

ものも含め100点として提示し、承認された。その後、正地先生にはさらに検討を続けていただき、今年度に入り90点と絞り込んでもらった。数的にはすべて展示できそうだったが、長着類は衣桁にかけるものもあるため、今年度も前期後期で一部展示替えをすることに決めた。

3. 展示構成

正地先生とは、博物館事務室で打合せを重ねながら構成を練っていたが、改めて平成30(2018)年6月7日(木)に山村明子(現代家政学科教授)館長(以下「館長」という。)を交えて三番町で打合せを行った。展示資料リストと特別展開催までのスケジュール表をもとに印刷物の大まかな原稿内容、提出期限や資料写真を見ながら、構成を基に実際の展示ケースごとの組み合わせなどを話し合った。組み合わせが十分に詰められないまま時間が来てしまったので、もう一度、持ち帰って検討し直し再度打合せの際に報告することになった。

7月5日(木)に三番町で館長を交えた2回目の打合せを行った。展示ケースの配置図も資料として持参し、現時点でのケースごとの組み合わせと衣桁に掛けるもの、畳んだままのものなど細かな部分も話し合った。また、タイトルについても検討した。昨年のタイトル「きもの、いとをかし」の「きもの」は残し、「晴れ着」が中心なので「ハレ姿」とし、それを着用していたのは、本学の卒業生なので、「家政学院生」はどうかと提案したが、卒業生以外のものもあるため、総称して「乙女」とすることになり、「きもの、乙女たちのハレ姿」となった。最後に、印刷物の担当原稿について再確認し、終了となった。

展示資料は婚礼衣装6点、長着・羽織・帯類35点、和装小物15点、子供衣装16点、その他(教員由来衣装、学生実習作品など)18点の90点。

構成は下記の通りである。

第1部: 婚礼衣装

第2部: 礼装・略礼装

*川本 利恵(かわもと りえ)平成30年度生活文化博物館学芸員

第3部：子供衣装

第4部：コラム展示（教員の紹介、授業風景など）

4. 印刷物

7月13・14日（木・金）に旧書道教室で、正地先生の指示を受けながら来週の撮影に備えて撮影予定の資料を出して順番に並べた。今回はほとんどの資料を衣桁に掛けた状態で撮影する予定なので、折皺などが目立つものには正地先生にアイロンをかけていただいた。2日間の予定で印刷所にカメラマンの手配を依頼し、7月20日（金）・23日（月）に、両日とも正地先生に立ち会っていただき写真撮影をした。衣桁に掛けたり外したりの繰り返しが多く、さらに形を整えるのに時間がかかったので、2日間それぞれ1時間延長して撮り終えることができた。（写真1）

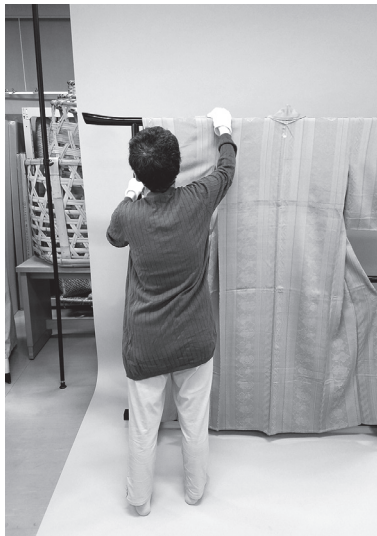


写真1 撮影の様子



写真2 チラシ表面

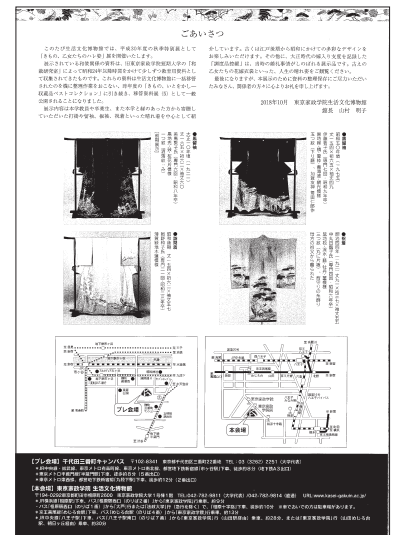


写真3 チラシ裏面



写真4 資料目録表紙



写真5 和装資料

内容は、あいさつ文、和装資料（写真5）、用語解説、晴れ着についての概説、和裁研究室の寄贈資料の説明という形式とした。概説は館長へ、用語解説と寄贈資料の説明は正地先生へ依頼した。

8月28日（火）に入稿し、10月5日（金）に1,000部納品となった。納品後内容の確認をした際に、生地 の文様と紋の名称に誤りが見つかり、正誤表を作成して差込みをした。

5. 展示作業

（1）プレ展示

解説パネルと垂れ幕、チラシ、展示目録ともに5日（金）に納品だったため、学内便で三番町へ送った。翌週10月9日（火）に作業を行った。三番町の1号館ロビーには常時2台のレンタル展示ケースが設置されており、振袖、帯など5点を展示した。ケース裏の壁面にはあいさつ文のパネルと晴れ着の概説および寄贈資料についてのパネルを掛けた。（写真6）また、展示ケースのそばに机を置いてもらい、チラシと展示目録を置いた。机の前には、チラシの表を前にして貼った。入口の壁面（写真7）とケースの向かい側にも垂れ幕を掛けた。

11月2日（金）にプレ展示の片付けを行い、資料は町田に返送した。展示ケースは次の利用者のために空のままにし、向かい側に本展示の会期が終了するまで机と垂れ幕はそのままにして、展示室のようすを録画した動画をモニターで流してもらうことにした。



写真6 展示のようす



写真7 1号館ロビー入口の壁面

（2）本展示

プレ展示が開催されている間の10月29日（月）から、本展示会場である町田の博物館展示室での作業が始まった。まず企画展の片づけを行い、10月31日（水）から展示作業に入った。

当館には、全体がガラス張りの「大ケース」と、大ケースの高さ半分あたりから上部がガラス張りの「中ケース」、上からのぞき見る高さの「のぞきケース」、中ケースの幅半分の大きさの「柱ケース」と称する4種類の展示ケースがあり、それぞれのケースへ資料を振り分けていく。

展示室の入り口に入って壁面に大ケース1台に打掛と掛下、長襦袢を飾り（写真8）、隣ののぞきケース1台に帯、『調度品控綴』などを置いた。窓側の大1ケースに白地の打掛（写真9）を衣桁に掛けて飾った。さらに柱を挟んで窓側に沿って大ケース1に振袖を衣桁に掛け、続く中ケースにT字台に掛ける形で振袖（写真10）を1枚ずつ飾った。次に柱ケースに単長着（写真11）を置いた。そこから直角に曲がり、中ケース2台に単長着や訪問着など（写真12）を置いた。訪問着は短大第1回の卒業アルバムの和裁研究室の写真に写っていたもので、その写真をパネルにして隣に貼り付けた。続く半ケースに帯類を並べた。さらに直角に曲がり、中ケース3台を置き、羽織や岡野和子先生（和裁研究室の資料収集に尽力された）寄贈の長着類（写真13）、ねんねこやモンペを飾った。それに向かい合う壁面には写真パネルと四つ身長着、部分縫い（写真14）、和裁研究室所属の先生方による著作教科書の初版本と自由に閲覧可能の教科書類を置いた。

中央にのぞきケース3台を一行に並べて島をつくり、子供の祝い着（写真15）やちゃんちゃんこなどを飾った。それに向かい合う壁面にはベニヤ板を組み立てた展示台で舞台を作り、6枚の黒留袖（写真16）を衣桁に掛け、1枚の祝い着をT字台に掛けて飾った。

すべて並べ終えた時点では、白地と茜緋地の打掛について、構成上では前後期で入替を行う予定だったが、白地のものはポスターに、茜緋地のものは展示目録の表紙と垂れ幕に使っていたため、それらを見たいと思った来館者をはっきりさせるのではないかと問題になり、急遽展示台を並べて白の布地で覆い、茜緋地の打掛を衣桁に掛けて飾った。（写真17）

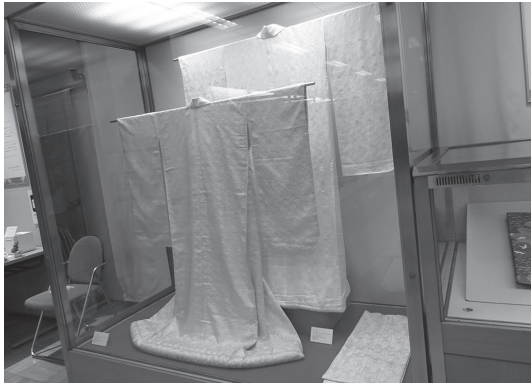


写真8 打掛一式（前期）



写真12 卒業アルバムに写っていた訪問着（中央）



写真9 白地打掛



写真13 岡野和子先生寄贈の長着類



写真10 振袖（前期）



写真14 学生が課題として提出した部分縫い



写真11 単長着



写真15 祝い着（前期）



写真16 黒留袖（前期）



写真19 黒留袖（後期）



写真17 茜紬地の打掛



写真20 祝い着（後期）

12月25日（火）には、後期展示に備えて展示替えを行った。打掛・掛下・長襦袢の一式、振袖（写真18）や黒留袖（写真19）、祝い着（写真20）など一部入替を行った。

プレ展示を含め本展示も、資料の列品には正地先生にご協力いただいた。



写真18 振袖（後期）

(3) 来館者参加コーナー

大学周辺から東京都、神奈川県、埼玉県、千葉県の一部を含む範囲とした地図を拡大パネルにし、そこに「どこからいらっしゃいましたか？」とタイトルをつけて自宅の場所にシールを貼ってもらうことにした。このコーナーも4年目を迎える。今回は地図の範囲以外の地域を関東、中部、関西などと区切って表示した。（写真21）タイトルを読んで貼ってくれる人が多く、家族や友達同士で場所を探しあうなど楽しそうな姿がみられた。

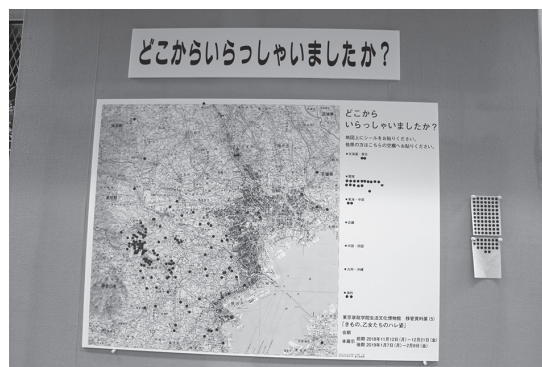


写真21 近隣圏地図

6. 広報活動

本学教職員には、チラシや資料目録を配布し、学生には本学構内にポスターを掲示して周知をはかっている。また、エントランスの管理棟の入り口（写真22）

と第3号棟の入り口、附属図書館の入り口（写真23）に垂れ幕を掛けた。なお、各新聞社、博物館、各県の教育委員会などの関係機関へチラシ、資料目録の配送を行った。

今回は、情報誌関係で掲載依頼があり、町田市の情報誌『まちびと』2018秋冬号（Vol.42）、学習塾の関塾から発行される『関塾タイムス』12月号、多摩美術大学学術学科フィールドワーク設計ゼミ発行の『Whoops!』Vol.21に当館の紹介とともに特別展も取り上げてもらった。また、地域情報誌「ショッパー」の11月16日（金）号と、平成31（2019）年1月23日（水）朝日新聞朝刊多摩版「多摩マリオン」に特別展の紹介記事が掲載された。



写真22 管理棟入り口



写真23 附属図書館入り口

7. 特別展開催

10月10日（水）にプレ展示がオープンし、展示場

所がロビーということもあり、学生が行きかえりに立ち止まって見ていく光景が多くみられた。

本展示がオープンした週末はKVA祭（大学祭）が開催され、11月17、18日（土、日）の2日間にわたり多くの方に見ていただいた。土曜日には午後1時半から正地先生によるギャラリートーク（写真24）が行われた。参加された皆さんは熱心に聞いてくださり、ときおり質問がでるなどして1時間ほどで終了した。



写真24 KVA祭ギャラリートークの様子

おわりに

今回は仕立てられた形で衣桁に掛けたものが多く、仕立てや模様の細部まで見られるのが魅力だった。

筆者もギャラリートークで、家紋の数や仕立てによる礼装のしきたり、子供の祝い着にも男女の差があるなどの話を聞き、奥が深い分野なのだなと感じた。現代風の変化も許容しつつ、永年にわたって紡がれてきた和服の伝統は後世に残していくべきだと改めて思った。来館された皆さんにも、和服の魅力を感じていただけたのなら幸いであった。

今回、多大なご協力をいただいた正地先生ほか、特別展にご協力いただいた関係各位に深く感謝申し上げます。

なお、和裁研究室の名称は、平成23（2011）年に東京家政学院短期大学生活科学科が廃止になるまでに研究室名を数回変更しているが、昨年度の特別展と同様に「和裁研究室」という名称で統一させていただいた。